

CONTENTS

- 1-2 青少年交流事業
日韓青少年によるオンライン交流
—新型コロナウイルス感染拡大の中で模索する新しい交流のかたち
- 3 交流エッセイ
外務省池田洋一日韓交流室長による日韓関係勉強会開催!
JENESYS韓国青年訪日団(第7~8回)向けの日程企画 in大阪
大学生訪韓団員向けの日韓オンライン座談会開催!
- 4-5 青少年交流事業
地域との連携により実施する訪日プログラム—2019年度の取り組みを中心に
- 6-7 フェロー研究紹介
「日韓は今こそ協力せよ」毎日新聞社外信部副部長 坂口 裕彦
- 8 助成事業紹介
時と場と人と—<俳舞>公演を終えて
詩舞楽カンパニー代表 金 利恵
- 9 フェローシップ・助成
2020年度訪日・訪韓フェローシップ採用者決定
2020年度助成対象事業決定
- 10-12 事業報告
青少年交流事業
理事会開催
故芳賀徹評議員を偲んで



公益財団法人 日韓文化交流基金

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2丁目21-2 ユニゾ水道橋ビル5F
tel. 03-6261-6790 fax. 03-6261-6780

青少年交流事業

日韓青少年によるオンライン交流 —新型コロナウイルス感染拡大の中で模索する新しい交流のかたち

2020年初めから世界を、そして私たちの日常を大きく揺るがしている新型コロナウイルスの感染拡大により、当基金でも各事業において影響を受ける事態となっています。2月には韓国大学生訪日団(第3団)、さらに3月には大学生訪韓団(第1~2団)がそれぞれ取り止めとなり、私たちが日頃から行っていた日韓両国の青少年が直接出会う形での交流を

施することが困難な状況となりました。

そのような中、これまでの交流によって深めた絆を確認し、外出自粛の中でできることは何かを考えた結果、当基金主催の青少年交流事業参加経験者を対象とした日韓オンライン交流(＃おうちで日韓交流)を4月20日にスタートすることになりました。当初は5月1日までの予定でしたが、日韓双方の学生から予想以上の反響があり、参加者である学生の声を取り入れ、6月下旬まで延長して実施中です。

今回、当基金で初めて実施されたオンライン上での交流で、日韓両国の若者たちの間でどのようなことが話し合わせ、どのような交流が行われたのかを紹介します。



オンライン上で交流する日韓の青少年たち

今回のオンライン交流では、ウェブ上で複数名が同時にビデオ通話ができるシステム「Skype」を利用し、グループトークルームを開設しました。交流時の言語は時間帯によって日本語と韓国語をそれぞれ設定し、内容はテーマに基づくディスカッションとフリートークを交互に実施しました。

日韓青少年によるオンライン交流 —新型コロナウイルス感染拡大の中で模索する新しい交流のかたち

4月、5月、6月の約3ヶ月間にわたる交流で参加した日韓の若者は延べ276人(6月18日終了時点の延べ参加人数)、日韓双方の参加者の比率もほぼ半々となりました。

5月以降は土曜日でも実施日に加えたところ、現役の学生だけではなく、多くの社会人も参加してくれるようになりました。6月以降はさらに、当基金青少年交流事業参加経験者に限らず、その友人にも参加枠を広げました。

ディスカッションのテーマについては「新型コロナウイルスと私たちの生活(例:オンライン授業の比較、就職活動やアルバイト、検査体制、街中の様子など、日々どう過ごしているか)」や、4月15日に韓国で行われた総選挙にちなみ「選挙文化や政治参画意識の違い(例:総選挙の投票に行ったか、投票で政治が変われると思うか)」などの中から、参加者がテーマを選び、議論を行いました。

このほかにも、それぞれの国に興味を持つようになったきっかけや、オンライン授業導入によって話題になっているIT環境の違い、さらには今後の交流プログラムのあり方などについても話題が及びました。

今回の交流で参加者たちが、どのようなことを話したのか、その一部を紹介します。

新型コロナによって生活はどう変わったか

〈日本側参加者〉

- ・(4月20日時点で)今は全く外出ができず、嫌になった。一人暮らしで家族もいないから一人であることがストレスになる。
- ・(4月24日の時点で)オンライン授業も始まらず、勉強モードのスイッチが入らない。通学時に電車に乗るなど毎日のルーティンがないのでやる気が起きない。

〈韓国側参加者〉

- ・オンライン授業が続いて、課題も多く大変。学校に行きたい。
- ・大学もオンライン授業、アルバイトも自宅で行う作業のため、外にも出ないので曜日感覚もなく生活のスイッチも入らない。

新型コロナによって困っていることは

〈日本側参加者〉

- ・授業のリモート化が全然進んでいない、先生方もITに疎く、討論もやりづらい。
- ・図書館も開いてなく、資料収集も出来ずレポート作成も厳しい状況。
- ・(5月下旬時点で)友達と会うことは可能だが、人によって反応が異なるため、誘いづらい雰囲気がある。

〈韓国側参加者〉

- ・大学1年になったが、まだ一度も大学に行っていない。大学生生活のスタートがこんな風になるとは思ってもいなかった。
- ・日本への留学を考えているが、留学関連の試験が全て中止になったため、とても落胆している。代わりに現在は中国語を勉強している。

他にも、日本側参加者からは(4月下旬時点では)マスクを入手できない、アルバイトの時間も減り収入が減ったなどの声も聞かれました。



共通の話題で盛り上がり、笑顔がこぼれます

withコロナといわれる今後について

〈日本側参加者〉

- ・(東京など首都圏の緊急事態宣言解除を受けて)自粛生活に慣れてきたところで、急に元の生活に戻るよう言われてもなかなか適応できない。
- ・(自分の住む福岡では小学校も再開となり)久しぶりにランドセル姿の小学生を見かける。日常の風景が見られるようになった。

〈韓国側参加者〉

- ・いつ自由に行けるようになるか気がかりではあるが、日本の友人にも会いたいし、ワーキングホリデーを使って日本に行きたい。
- ・コロナさえ終息すれば、今すぐにでも日本に行きたい。

参加者たちからは、「新型コロナに対する日韓両国の対応の違いなどを知ることができたほか、恋愛の話など、幅広い分野の話ができ、大変興味深かった」(日本・大学4年男子)、「感染症や選挙の話題から、日韓関係、そして文化交流まで、幅広いテーマで議論することができて良い機会となった。また、訪韓後に抱いていた疑問について直接韓国人に聞くことができたのもよかった」(日本・大学2年女子)といったように、交流を通じ、様々なテーマについて話し合うことができて有意義な時間になったとの感想が聞かれました。

このほか、「交流の途中、韓国の参加者のマイクを通して新型コロナに関する警報が鳴ったのが聞こえ、それによって私たちが今なぜオンラインでしか会えないのかということを実感した」(日本・大学3年女子)、「対面交流が不可能な状況の中、意味のある交流を通じて協力し合うことができて、とてもよかった」(韓国・大学4年男子)、また「3時間近く日本語で話す事ができてよかった。韓国では日本語を話せる機会が少なく、特に外出が難しい状況の中で行われたので、意味のある時間となった」(韓国・大学4年男子)など、外出自粛といった制限のある中からこそ生じたインパクトもあったようです。

日韓関係や日韓交流について率直に意見交換するような場面も多くありましたが、「これからは私たち若者世代が新しい日韓関係を作り上げていきたい」と参加者の皆さんが意欲的に語る姿が印象的でした。

当基金では今後も、日韓の青少年が引き続き日韓交流に関心を持ち続け、積極的に交流を積み重ねていけるよう、さまざまな交流の場を提供できるよう取り組んでまいります。



● 外務省池田洋一日韓交流室長による日韓関係勉強会開催！

JKAF会長(2017年度日本大学生訪韓団参加) 渡辺 一花

JKAFでは、さる2月9日に訪韓団の団長を務められ、ご自身も訪韓団OBである外務省アジア大洋州局北東アジア第一課の池田洋一日韓交流室長を講師としてお招きし、JKAFメンバー向けの日韓関係の勉強会を開催しました。当日は30名が参加し、日韓関係の現状に関する講義と、参加者による質疑応答が行われました。

日韓関係の最前線で活躍されている池田室長は講義の中で、メディアでは取り上げられない部分の解説を丁寧にしてくださいました。また質疑応答では、韓国世論の現状や民間の立場からできることなどの熱心で鋭い質問も飛び出し、参加者の日韓関係に対する関心の高さも垣間見えました。課題が多い日韓関係での日本政府の立場を改めて理解し、新しい情報を得ることができた貴重な時間となりました。



日韓関係勉強会開催当日の様子

● JENESYS韓国青年訪日団(第7～8団)向けの日程企画 in大阪

JKAF実行委員(和歌山大学4年) 姜愛美

2月19日から10日間日本を訪問した、在釜山日本国総領事館、在济州日本国総領事館選抜の韓国青年訪日団(第7～8団)が関西を訪問し、初めての試みとして、26日の日程案をJKAF関西支部が企画しました。

当日は、訪日団30名と全国各地からJKAFメンバー14名が大阪に集い、テーマを「在日朝鮮・韓国人」として鶴橋・生野コリアンタウンでのフィールドワークから韓国民団大阪本部での講義、4つのグループでの自由視察と報告会を実施しました。

関西で最も大規模な鶴橋・生野コリアンタウンでは、商店を見学し在日コリアンの方と交流することで、在日コリアンの現状の把握とより具体的なイメージを持つことができました。民団大阪本部では在日韓国人の現況と人口変化、現存する制度的差別と在日韓国人の祖国への思いについて講義を聞くことで、日本に住む韓国・朝鮮人の現状と歴史、アイデンティティの形について学ぶことができました。講義後には、大阪府内の大学や在日コリアン関連機関をはじめ4つの行き先に分かれ、自由視察を行いました。最後の報告会では、グループの代表者が

それぞれの視察で行ったことや感じたことを発表しました。「在日同胞の存在は知っていたが、ここまで深く民族教育が根付いていることを全く知らなかった。韓国内でも在外国民のことにより関心を持ってほしい」、「日本の大学生との議論の場で、日本と韓国の大学制度の違いや大学生活について話すことができ、日本に留学したいという気持ちが大きくなった」などの感想がありました。

今回の交流会で日韓の間に位置する在日コリアンの方々との交流し、意見交換することで、日韓の歴史認識を新しい角度から見つめ直す機会となりました。

そして今回の交流会は、JKAF内で初めて地方支部として設立された関西支部が中心となり企画しました。今後は関東だけでなく、関西でも地域の特性を生かした日韓交流イベントの企画を行い、JKAF内の繋がりを築いていきます。



自由視察で訪れた大阪城公園にて青年訪日団の皆さんと一緒に

● 大学生訪韓団団員向けの日韓オンライン座談会開催！

JKAF会長(2017年度日本大学生訪韓団参加) 渡辺 一花

3月18日から3月28日の内の5日間、新型コロナウイルスの影響で訪韓が見送られた大学生訪韓団(第1～2団)の参加者を対象に、JKAF(訪日団OB・OG会)とのオンライン座談会を実施しました。

韓国人が持つ日本に対するイメージについての質問や、話題になった韓国での日本製品の不買運動の現状、韓国に対し疑問に思うことを日本側参加者が投げかける場面や、今後の日韓関係のために自分たちができることについての議論が行われました。この座談会は、訪韓前に各自が持っていた不安や疑問の解決や、これまで韓国にあまり関わりのなかった人にとって、韓国に対するイメージをつかむきっかけとなりました。

4月には、日韓文化交流基金主催のオンライン交流会(詳細は本誌1-2頁に掲載)も行われ、多くのJKAF・KJAFメンバーが参加しました。フリートークの時間と討論の時間に分かれ、討論の時間には、若者の政治参加、共通の社会問題、コロナウイルスに対する両政府の対応まで幅広い討論が行われました。

実際に会わずともオンラインを通じて新たな知識を得ると同時に、国を超えて友達を作ることができた素敵な「#おうちで日韓交流」となりました。

地域との連携により実施する訪日プログラム —2019年度の取り組みを中心に

韓国の若者と青森県知事「津軽海峡・冬景色」を歌う—韓国青年訪日団(第4~5団)

2020年1月29日から2月7日の日程で実施した韓国青年訪日団(第4~5団)は、主に青森県を訪問し、テーマ「青森の食の安全と防災」に沿った講義や視察、体験に加え、ホームステイ、青森大学学生及び韓国語学習者の皆さんとの交流を行いました。青森県に滞在した全7日間の日程は、青森県庁及び青森県国際交流協会の全面協力により実現しました。青森県と韓国のつながりを実感した団員たちですが、中でも印象に残ったと感想に挙がったのは、やはり三村申吾知事表敬です。三村知事は一行を大いに歓迎してくださり、石川さゆりの「津軽海峡・冬景色」を団員と共に合唱する一幕もあり、会場は大いに盛り上がりました。交流の様子はNHK青森放送局をはじめ、県内各紙で報道されるなど、大きな反響を呼びました。

*日程紹介

	日程内容
1/29	入国(東京国際空港),【視察】江戸東京博物館,【講義】「最近の日韓関係について」
1/30	第4団:【学校訪問】国際基督教大学 第5団:【学校訪問】法政大学
1/31	【講義】「日本の水産物の安全性について」 【交流・意見交換】日本の大学生との意見交換会
2/1	青森県へ移動,【視察】八食センター,【講義】「八戸市の防災について」
2/2	【視察・概要説明】八戸市みなと体験学習館,グレットタワー,ホームステイ地域へ移動
2/3	終日ホームステイ
2/4	ホームステイより再集合,【交流】ホームステイ報告会交流会(ホストファミリーと共に)
2/5	【表敬】三村申吾 青森県知事,【講義】「青森県の食の安全の施策について」,「青森県と韓国との民間交流について」,【交流】青森市内「街歩き」コース企画,フィールドワーク(青森大学学生,県内韓国語学習者と共に)
2/6	【講義・体験】「青森県の防災計画について」,青森県消防学校内の災害シミュレーション設備による体験,成果報告会
2/7	出国(青森空港)

●団員の感想

韓国技術教育大学校 産業経営学部1年(訪日当時)
金善奎(キム・ソンギュ)さん

三村知事が、笑顔で私たちみんなに手を振りながら会場に入って来られた様子が、親しみを感じると共に緊張が解けました。青森の有名な観光地、自然そして季節のお祭りなどについても楽しく説明してくださいました。特に、ねぶた祭を説明する時には、知事自ら県庁関係者の方々と一緒に笑顔で踊られて、心から私たちに青森の魅力を伝えたいと思われているのだと

感じました。

行事の後知事は、全ての団員に名刺を渡しなが握手もしてくださいましたが、日本の演歌が好きで私が、石川さゆりの「津軽海峡・冬景色」をきっかけに青森県に関心を持つようになったと話したところ、知事は笑いながら先にその歌を歌い出してくださり、私も一緒に歌いました。知事と一緒に歌を歌い、その様子がメディアにも取り上げられ、非常に貴重な経験となりました。今回の交流を通じ、現在、日韓の関係は難しい状況ですが、両国に三村知事のような方がいらっしゃれば、両国の関係は早く良くなるのではないかと感じました。

演歌が好きで私は、吉幾三の「津軽平野」を通して、青森県を知りました。今回実際に青森県を訪問し、岩木山に積もった雪を見て、韓国ではそれほど雪を見たことがなかったため驚きました。板柳町でホームステイをした際は、言葉が通じないのではないかと心配もしましたが、ホストファミリーの方が、美味しい食べ物を準備してくださったり、色々な場所に連れて行ってくださり、大変良いご縁ができました。

今はコロナウイルス感染拡大の影響で大変な状況ですが、日韓の国民が互いに交流できる日が早く訪れることを祈っています。



共に歌った後に、三村知事と気持ちが通じ合いました(写真右:金善奎さん)



三村知事を囲んで



青森県防災学校での防災に関する講義

公益財団法人 日韓文化交流基金
理事長 小野正昭様

拝啓 早春の候 ますます御清祥のこととお喜びを申し上げます。
この度は、韓国青年訪日団(第4団・5団)を本県に派遣いただき、心より感謝申し上げます。全10日間の訪日期間のうち、7日間を青森県に滞在いただき、八戸市や五所川原市での交流、観光や食、街歩きなどの各種体験や民泊等による県民との触れ合いなどを通じ、参加者の皆様には、青森県の魅力を理解いただくとともに、青森県民との深い絆を結ぶことができたものと、非常に嬉しく思います。
私自身、韓国の大学生との交流の機会に、一つの輪になり「津軽海峡冬景色」を歌うなど、楽しいひと時を一緒に過ごすことができました。
これまで、韓国と青森県は、就航から25年を重ねる青森・ソウル線で結ばれ、経済、観光、文化、教育など幅広い分野で交流を深めてきました。
私は、韓国と青森県の交流が、一層活発になるよう取り組んでいきますので、今後とも、貴基金による御支援を賜りますようお願い申し上げますと共に、貴基金のますますの御発展をお祈り申し上げます。

敬具

2020年2月吉日

青森県知事 三村申吾

当基金宛に後日届いた三村知事からのお礼状

これまで韓国の教員・大学生・高校生等、約2万7千名が訪日プログラムに参加し、日本全国各地を訪問してきました。訪問地域の方々との連携により作り上げる訪日プログラムでは、地域の先進的取組み、産業、文化等を紹介するとともに、学校訪問やホームステイ等を通じて地域の方々との交流を深めてきました。2019年度、特に反響の大きかった地域訪問及び交流の様子を紹介します。

韓国の若者、高知県で防災について学ぶ—韓国青年訪日団(第7～8団)

2020年2月19日から2月28日の日程で実施した韓国青年訪日団(第7～8団)では、主に高知県を訪問しました。県訪問が決まった段階から高知県東京事務所にコンタクトを取り、テーマ「日韓交流と日本の防災対策」に沿った講義と訪問地の紹介を依頼しました。県との連携で一から作り上げた日程により、団員たちは韓国とのつながり、日本の先進的な防災対策について学ぶことができました。

高知県では関係者からの歓迎のほか、県と韓国のつながりについては県国際交流課から、防災に関しては県南海トラフ地震対策課から講義を受けました。その後、南海トラフ地震発生時に34メートルもの最大津波が到達すると予想されている幡多郡黒潮町での防災ワークショップ、避難タワーへの避難訓練も体験しました。災害時には自分で考えて行動するという防災意識を高めるきっかけとなったようです。

*日程紹介

	日程内容
2/19	入国(成田国際空港),【講義】「最近の日韓関係について」
2/20	【交流】韓国語学習者との交流会(意見交換会,フィールドワーク等)
2/21	高知県へ移動,【表敬】高知県庁関係者,【講義】「高知県の概要と韓国とのつながりについて」,【講義】「高知県の防災対策について」
2/22	幡多郡黒潮町へ移動,【交流】ホームステイ対面式
2/23	終日ホームステイ
2/24	ホームステイより再集合,【視察】高知県幡多郡黒潮町内の防災対策,【地域文化体験】かつおのたたき作り,愛媛県へ移動
2/25	大阪府へ移動,【視察】あべのハルカス(耐震・制振構造)
2/26	第7団:終日,大学生訪韓団OB/OGの学生と交流 【視察】生野コリアタウン,【訪問】在日本大韓国民団大阪府地方本部,【講義】「在日社会について」,報告会及び意見交換会 第8団:【視察】朝鮮人街道,本願寺八幡別院,旧伴家住宅等,【学校訪問】立命館守山中学校・高等学校(合同授業,交流会等)
2/27	終日,大学生訪韓団OB/OGの学生と交流 【日韓共同授業①,文化体験】「落語」体験～落語の歴史等のレクチャーと共に,【日韓共同授業②,視察】阪神淡路大震災記念「人と防災未来センター」,【講義】阪神淡路大震災被災者の体験談,成果報告会
2/28	出国(関西国際空港)

●高知県国際交流課の訪日団受入れに関するコメント

高知県国際交流課 主幹 池田 晃久さん

日韓文化交流基金様からのご紹介で、2月21日(金)から2月24日(月)の期間で、韓国青年訪日団(第7～8団)の皆様を高知県で受け入れさせていただきました。

県庁を訪問された際、高知市出身で、韓国の全羅南道木浦市で孤児3,000人を育て「木浦の母」と慕われた田内千鶴子さんのご縁で、1997年から友好交流を続けております全羅南道との交流を紹介させていただきました。特に、漫画家輩出率日本一である高知県が毎年開催している「まんが甲子園」への全羅南道からの参加など、文化を軸にした交流について紹介いたしました。

さらに、県南海トラフ地震対策課より、来る南海トラフ地震に備えて県が行っている防災対策への取り組みをご紹介させていただきました。取り組みのご紹介を通じて、韓国においても、災害を正しく恐れ、防災文化を根付かせることの重要性をご理解いただいたことと思います。

今回高知県を訪問されました訪問団の皆様には、ぜひ高知県のことを覚えていただき、今後の交流推進に向けた礎となっていけることを期待しております。

●団員の感想

釜山外国語大学校 日本語創意融合学部1年(訪日当時)

宋旻眞(ソン・ミンジン)さん

今回の日程で一番深く印象に残ったのは高知県で聴いた南海トラフ地震に関する講義です。大地震が30年以内に起こると予想し、着実に対策を練っていく様子を見て、韓国でも最近地震が頻発しているのに、このような対策を立てているのか疑わしく思いました。これまで、自然災害は予測不能で事前の対策が難しいと思っていましたが、高知県の対策を学んだことにより、十分予測が可能であり事前対策も可能であることを実感することができました。日本の防災関連技術が思っていたよりも発展していることに感心しました。

黒潮町内の防災対策～避難タワーへの避難訓練



高知県関係者表敬



ホームステイお別れ式
ホストファミリーとの別れを惜しむ

2019年度訪韓フェローシップ「オピニオンリーダー育成コース」の対象者として5カ月間韓国に滞在研究をされた坂口裕彦氏のレポートを紹介します。

20年以上も働いてきた新聞社を初めて休職し、2019年10月から20年2月末まで、日韓文化交流基金のフェローシップで韓国に滞在できた。くしくも、元徴用工問題などで、1965年の国交正常化以来、最悪とも言われる日韓関係。だからこそというわけではないが、期間中、「日韓関係の復元力」というテーマを切り口にしながら、毎日の生活での発見や、人々との出会い、実際に地方に出かけて感じたことを柔らかいタッチでコラムに仕立てることにした。最低月1回で、3000字以上。発表の場は新聞社のサイトと、後日Yahoo!ニュースへの配信である。

まずは住まいと選んだのは、ソウル西部の新村にあるコシテル。部屋の広さは、4～8畳程度で、シャワーとトイレが付いていて、同じフロアには10以上の部屋があった。こんなに狭い空間をここまで使い尽くすのかと、びっくり仰天したが、結果的には、友人らとの交流を大いに楽しんだ。現地に住んで、地元の人々とふれ合う。訪れたかった現場に行けば、「ヘー」と思ったことを書く。おそろおそろ構想を打ち明けた基金の皆さんには、むしろ背中を押してもらい、自由に楽しく、やりがいがある研修となった。



4畳ほどのスペースに、シャワーやトイレ、ベッドや机などが設置された「コシテル」の部屋

「朝鮮通信使」の道のりたどり ソウル、釜山、対馬へ

たくさんの出会いのすべてを紹介できないのが残念でならないが、2019年11月に訪れた釜山と、韓国語で読めば「テマド」となる長崎県対馬への「一時帰国」は、今もとても印象に残っている。1607年から1811年の間、朝鮮から日本へ12回派遣された外交使節団「朝鮮通信使」。ソウルを出て、釜山、対馬、さらには

下関や大阪、京都などを經由して、東京、日光へと旅した通信使の道のりをたどることができるのは、人生でまたとないチャンスだったからだ。

釜山から対馬北部に位置する比田勝(ひたかつ)港までは、釜山からわずか約50キロしかない。国境を越えるのだが、東京からだと横須賀、大阪からだと大津や和歌山に行くのとほぼ同じ距離だ。

たったの1時間で船が比田勝港へとたどりつき、入国審査を済ませると、真っ先に目に飛び込んできたのは、「私たちは観光客の皆さんを歓迎します」と韓国語で書かれた横断幕を手にした地元の人々の姿だった。

2018年は41万人も対馬を訪れた韓国人観光客が、19年7月以降は対前年比で9割も減っていた。ただし、個人的に驚いたのは、人口3万人の島に、その数十倍もの韓国人観光客が押し寄せていたということだ。10年間で10倍以上も増えたという。対馬は見事なまでに韓国人の観光客呼び込みに成功していたのだ。

ソウルや釜山の喧噪を忘れてしまいそうな波静かな海と、濃い緑。ソウルは最低気温がすでに氷点下だったけれど、対馬は昼前で、スマートフォンのお天気アプリによる温度計は18度の温かさだ。国境近くを旅しているという感覚も気持ちが良い。釜山行きへの帰りの高速船は夕方。対馬は日帰りであっても、「日本の休日」をかなりぜいたくに満喫できる場所だった。

釜山で立ち寄った韓国最大の魚市場「チャガルチ市場」も、対馬に負けず劣らず、素晴らしかった。潮の匂いと、作業服を着たおばさんたちの威勢良いかけ声、そして、区分けされた水槽で生かされた無数の魚たち。まるで水族館のようだった。ただ、日本人観光客らしい人影はお世辞にも多いとは言えなかった。

昔から、日韓交流の先頭に立ち、大きな役割を果たしてきた対馬と釜山が、その近さゆえに、政治対立の波しぶきをもろに受けるというのは何と皮肉なことだろう。「実にもったいないことが、日韓双方で起きている」と思えてならなかった。



比田勝港から釜山港へ向かう高速船

訪韓200回超のブロガーに見た新たな可能性

嘆いてばかりはいられない。世界中の人やモノ、カネが移動し、情報もつながるグローバル化が進むからこそ、新しい方法も駆使し、日韓関係は展開できる。そうした視点で依頼した取材に快く応じてくれたのが、200回超の訪韓歴を誇り、「韓国の魅力は、地方にあり」と説く「ブロガー ピョン」こと、小暮真琴（こくれ まこと）さん(58)＝川崎市在住＝だ。

グローバル化の象徴とも言えるスマートフォンのカメラで、料理の写真をパチリ。メニューや値段、味付け。わからないことがあれば、すかさず店員に尋ねる。ネアカな性格で、ぐいぐいと情報を引き出す取材力は驚くべきものだった。

首都ソウルを代表する繁華街・明洞から、ぶらりと歩ける「乙支路3街」は、庶民的な風情が残る街。レトロな雰囲気漂う冷麺屋「乙支麺屋」の2階で、ゆで豚と冷麺、ビールとマッコリも味わいながら、小暮さんに自らの流儀を笑顔で紐解いてもらった。

韓流ドラマに魅せられて、初めて訪韓したのは2006年という小暮さんの話が、がぜん熱を帯びたのが「地方めぐり」の楽しさだった。18年10月には、韓国にある全162市郡を訪れる「全国行脚」をついに達成し、最近では月3回ペースだという。その証拠に、毎日更新するブログのタイトルも「全州(チョンジュ)にひとめぼれ! 大邱(テグ)が恋しくて!」と、ソウルではなく地方都市の名前を冠している。09年～13年は全州を中心に、13年以降は大邱を中心に訪問したからだという。

ソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)で、簡単につながることができるデジタル社会だからこそ、展開可能なテーマは無数にある。端から見れば、たわいないかもしれないが、当事者たちは本気そのもので語らずにはいられない小さな日韓交流の積み重ねは、隣人関係をほぐさないだろうか。

新型コロナ禍が映した「グローバル化時代の隣人関係」

そして今、日韓両国にとって、同時進行の大きな危機となっているのが、新型コロナウイルスの世界的な流行だ。韓国では2月下旬になって新型コロナウイルスへの感染者が一気に増えた。特に感染者が集中的に発生したのが、ソウル、釜山に次ぐ、第三の都市大邱だった。私はたまたま、2月1、2日にたまたま大邱市がグローバル社会を見据えて、力を入れる「医療観光」を取材するために訪れていた。

国境を越えて移動する人が飛躍的に増えたからこそ、大邱は外国人をターゲットにした医療観光を展開できたし、世界中に拡大した新型ウイルスの猛威にもさらされた。この構図は、インバウンド(訪日外国人客)を大きく増やすことに成功し、今は苦境に立つ日本各地の観光地もまた同じだ。ウイルスの正体がまだはっきりとわからない中、当事者たちの自助努力でどうか打開できるものでないという点も共有している。新型ウイルスの感染拡大のあおりを受けて、私自身も予定より1週間早く、日本へ帰国することになった。

グローバル化が進展する中で、日本と韓国は、一緒に利益も生み出せるし、リスクも共有する関係になっている。新型ウイル



ソウル市が空き倉庫を改造してオープンした公共本屋「ソウル本宝庫」。インスタ映えスポットになっている。

スの感染拡大は、このことを改めて浮き彫りにした。非常に厳しい状況を共有する今こそ、双方が手を携えて乗り切り、「グローバル化した時代の隣人関係」を再確認できないだろうか。

日韓関係の復元力を悲観しない

日本と韓国は「隣人」だけど、「小さく違う」。だからこそ、摩擦は生じる。そして、それぞれの国の外交姿勢は、それぞれの国のリーダー像や、内政の「いま」を映し出すから、時にいかんともしがたい局面も当然、起きてしまう。経済的なパワーバランスも変わってきている。「最悪な日韓関係」をもっと悪くしないように関係者が力を尽くしているのが現状だろう。

それでも、経済や文化、草の根交流などさまざまな分野で「信頼のパイプ」があるなら、いつかまた良くなるチャンスは大いに出てくるのではないかと。実際、5月初旬には、急性白血病で緊急治療が必要になったインド在住の韓国人女兒(5)の帰国に日本が協力した。私は、日韓関係が復元する力を悲観していない。こんな風になってしまうのは、やはり、初めてとなる韓国での生活に親しみ、多くの人々との出会いにも恵まれたからだろう。



PROFILE

坂口 裕彦 (さかぐち ひろひこ)

1998年毎日新聞社に入社。山口、阪神支局を経て、政治部。首相官邸や自民、公明両党、外務、防衛、厚生労働省などを担当した。その後、外信部、ウィーン支局、政治部副部長などを経て、現在は外信部副部長。2019年10月～2020年2月まで日韓文化交流基金のフェロウシップで韓国に滞在した。著書に15～16年に起きた欧州難民・移民危機をテーマにした「ルポ難民追跡 パルカールトを行く」(岩波新書)。

時と場と人と— はいまい 〈俳舞〉公演を終えて

詩舞楽カンパニー代表 金 利 恵

●俳舞という舞台表現

〈俳舞—俳句を舞う〉公演。東京は本年1月15日青山の鉄仙会能楽研修所、名古屋は16日今池ガスホールで無事に終えることができた。

日本の伝統定型詩である俳句と、韓国の伝統舞踊が共にある舞台表現。この俳舞の提案は、韓国の文人、初代文化相の李御寧先生。「俳画も俳歌もあるけれど俳舞はまだない。これは世界で初めてのこと。日本と韓国の文化を共に持ち、舞踊という身体表現で言語を超え、同時に自らの心を俳句ということばにしている、君だけができることだよ」。

ソウルで俳句に出会ったのは、2003年。ソウルジャパンクラブの俳句会に誘われた。そのきっかけを作ってくれたのが2002年の日韓文化交流基金賞受賞だった。李先生の提案から10年の歳月と紆余曲折を経て、俳舞は現実の形となった。

俳句という極小の詩は、人の心の内や自然をうたって、同時に広大な空間と悠久の時間を秘めている。そして、俳句の五七五の音字は旋律やリズムを生み出す。韓国の舞は深い心のありようをあらわし、同時に自然や宇宙につながるもの。心が俳句となり、そのことばにリズムが生まれ、からだが応じ、音楽が流れ、舞は自由に広がる。

●韓日の伝統音楽演奏と

韓国の演奏はチャンゴ*と正歌(チョンガ)。日本は鼓と笛(篠笛・能管)。チャンゴは、今までにない鎮静と余白の演奏。また、正歌は俗楽に対する正楽の一つで昔からソンビ(李朝時代の学識者)たちの心身の修養のために歌われた。日本は鼓と笛。〈白い道成寺〉や〈日韓音楽祭〉などでも何度も一緒に作業した演奏者たちと。この鼓と笛の音が緊張と余白を生みだす。

●起景結解で四つの自作句

「네고(ネゴ) 달고(タルゴ) 맏고(メッコ) 풍다(ブンダ)」。漢字にすると、起 景 結 解(景:連ね、展開して“景色がひらかれる”)で、韓国伝統芸能の原理とも。つまり、始まり、展開し、結んで、解いて、また始め、展開して…。ずっとつながって流れる。すべては解いてまた始まる。韓国伝統舞踊の呼吸は円を描いて巻き上げる。動きは曲線。止まっているようでもその奥で呼吸が流れ、巻き上げて留まることなく膨らみ、縮みまた広がって流れる。

起 〈語るとき語らぬときも花の下〉

旅人が場を訪れ俳句を残して行く。世界でもっとも短い詩である俳句が、世界でもっとも長い息をして歌う正歌を招き入れる。句と場と音楽と舞と集まった人々と…新しい座が始まる。

景 〈ひらひらと夢に火照りぬ酔芙蓉〉

ことばにリズムがある。私のからだに沁み込んだ韓国のリズムが流れる。五七五の音字が、韓国のチャンダン(リズムパター

ン)と重なる。

“ひらひら とお〇〇 〇ゆめに ほてりて すいふよ お〇〇〇”の12拍で数える。あるいは、“ひらひらとお〇〇 〇ゆめにほてりて すいふよお〇〇〇”と3拍でチャンダンと戯れる。

結 〈鶏頭花胸の高さに佇ち炎ゆる〉

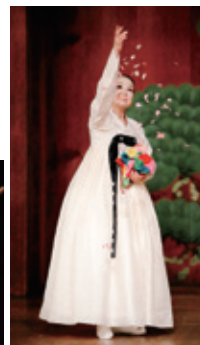
韓国民俗舞の神髄である僧舞をモチーフに。両手に真っ赤な鶏頭花を持った。続いて京畿都堂クツのチャンダンで地を踏み固めるジシンパルキ(지신밟기:地を踏み固め邪気を祓う)。複雑多彩な独特のチャンダンと息を合わせる。

解 〈旅人に風の峠の飛花落花〉

以前、『望恨歌』という新作能を舞ったときにもタドゥミ(다듬이:韓国の砧)を打った。第二次世界大戦下、日本に渡り九州の炭鉱で亡くなった夫を待ち続けた韓国の老女の話だった。「から砧取り出し 打てば心の月清み 寝られぬ長き夜すがら 恨みの砧 空に鳴り…」という地謡。遠くへ行った夫に思いを馳せて、無事に帰って来て、と新妻が届けとばかりに打ち続ける。



1月15日の公演より



●俳舞という新しい座

俳句と舞が互いに呼応し、促し、交わり、さらに舞になり句が生まれ…。俳舞はやっと形になったばかり。日韓の多くの方々力を得、さらに会場でもご一緒していただいた。時と場と人とで成る俳句の〈座〉とも重なる。この新しい座がさらに次の座へと流れ広がっていくことを思い描いてみる。

*…伝統的な打楽器

PROFILE

金 利 恵 (キム・リヘ)



詩舞楽カンパニー代表
東京に生まれ育つ。5歳よりバレエを習い、20歳で祖国の伝統舞踊に出会う。1981年単身帰国し人間国宝李梅芳の門下に。「韓舞 白い道成寺」、「水と花と光と」、「JAL音舞台」、「韓舞望恨歌」、「俳舞」、パリ太陽劇団にて長期ワークショップなど。1991年〈KBS大韓民国音楽大競演〉金賞、2002年〈日韓文化交流基金賞〉受賞。エッセイ集『風の国 風の舞』(水曜社)上梓。2003年、ソウル俳句に出会い、自ら詠み始める。2017年「藍生」新人賞受賞。

▶ 2020年度訪日・訪韓フェローシップ採用者決定

2020年度訪日・訪韓研究支援（フェローシップ）には37名（訪日30名、訪韓7名）の応募があり、審査の結果訪日5名、訪韓2名の採用を決定しました。

訪日フェロー

氏名	研究テーマ	所属機関	職位	受入機関
李元徳	米中戦略経済と韓日関係の未来ビジョン探究	国民大学校	教授	慶應義塾大学法学部
金相鎭	韓日関係・エネルギー協力	中央日報	記者	日本国際問題研究所
裴俊燮	後発福祉国家の政治学的分析	神戸大学	大学院生	神戸大学
朴東旭	日本地方創生と韓国の都市再生の時代、両国の地方都市の現状と方向	民主研究院	研究委員	京都大学大学院
孫仁柱	ポストアメリカンアジア：日本、韓国、中国	ソウル大学校	政治外交学部副教授/ 中国研究所所長	東京大学公共政策大学院

訪韓フェロー

氏名	研究テーマ	所属機関	職位	受入機関
秋元大輔	日韓の議会交流の歴史と役割について：日韓・韓日議員連盟の視点から	衆議院 (遠山清彦国会事務所)	公設秘書	世宗研究所日本研究センター
鈴木賢一	日韓議員連盟の英語交流など、政治対話の改善方策について	国民民主党	広報局部長代理	国家安保戦略研究院

▶ 2020年度助成対象事業決定

2020年度人物交流助成には52件の申請があり、この中から15件への助成が決定しました。

● 助成対象事業一覧(実施日時順)

(2020年5月末現在)

事業名	申請団体	場所
日韓芸術通信part5「温度 / 온도(オンド)」	日韓芸術通信実行委員会	京都・The Terminal KYOTO
第35回日韓学生会議夏季交流大会	第35回日韓学生会議	京都
私たちが作る日韓未来! 第14回韓日未来フォーラム	韓日社会文化フォーラム	島根県立青少年の家
日韓学生未来会議(Japan Korea Students Future Forum)	第15回日韓学生未来会議準備委員会	沖縄
宗像フェス日韓環境国際交流	宗像フェスCSR推進実行委員会	釜山市、福岡県宗像市、福津市
「日韓交流おまつり2020 in Seoul」舞踊団正藤派遣事業	舞踊団正藤	ソウル・COEX国際展示場ホール
「日韓交流おまつり2020 in Seoul」喜楽座派遣事業	日本総合伝統芸能集団 井坂斗絲幸社中 喜楽座	ソウル・COEX国際展示場ホール
第12回 福岡インディペンデント映画祭2020	福岡インディペンデント映画祭実行委員会	福岡市科学館サイエンスホール
立命館守山中学校中学生海外(公州市)派遣事業	立命館守山中学校	滋賀・立命館守山中学校
東京アスロック 日韓合作『三人姉妹』(仮)	一般社団法人unlock	神奈川・KAAT神奈川芸術劇場
対馬の歴史と文化と自然を知る日韓ユース・ワークショップ	朝鮮文化財ワークショップ実行委員会	長崎・対馬市内
第14回アジア国際青少年映画祭	有限責任事業組合アジア国際青少年映画祭日本	東京・武蔵野美術大学
日中韓共同研究の出版記念シンポジウム	貧困研究会	大阪市立大学梅田サテライト
韓国現代戯曲ドラマリーディングX(仮)	一般社団法人 日韓演劇交流センター	東京・「座・高円寺」
第2回日韓友好のつどい in OITA	NPO法人日韓芸術文化交流会	大分・J.COM ホルトホール大分

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2019年12月1日から2020年3月31日までの実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	団長	人数計	期間	主な訪問先
アジア国際子ども映画祭参加訪日団	鄭熙範 (チョン・ヒボム) 韓国デジタルメディア高等学校 教師	7	12/3 ~ 12/9	吉備国際大学 兵庫県 (神戸市、明石市、南あわじ市)
韓国青年訪日団 (第4団)	宋浣範 (ソン・ワンボム) 高麗大学校 グローバル日本研究院 副院長兼教授	36	1/29 ~ 2/7	国際基督教大学 東京都、青森県 (青森市、八戸市、五所川原市、北津軽郡板柳町・中泊町、つがる市)
韓国青年訪日団 (第5団)	崔泰和 (チェ・テファ) 群山大学校 東アジア学部 日語日文学専攻 教授	36		法政大学 東京都、青森県 (青森市、八戸市、五所川原市、弘前市)
韓国青年訪日団 (第6団)	金恵泳 (キム・ヘヨン) 西海高等学校 教師	12	2/12 ~ 2/21	広島県立五日市高等学校 京都府京都市、広島県 (広島市、廿日市市、呉市、福山市)、岡山県 (岡山市、瀬戸内市)
韓国青年訪日団 (第7団)	李孝仙 (イ・ヒョソン) 釜山外国語大学校 日本語創意融合学部 教授	31	2/19 ~ 2/28	東京都、高知県 (高知市、四万十市、幡多郡黒潮町)、大阪府大阪市、兵庫県神戸市
韓国青年訪日団 (第8団)	崔善吉 (チェ・ソングル) 光明高等学校 主席教師	17		立命館守山中学校・高等学校 東京都、高知県 (高知市、四万十市、幡多郡黒潮町)、大阪府大阪市、滋賀県近江八幡市、兵庫県神戸市

*韓国青年訪日団 (第6団) は当初31名予定、同 (第7~8団) は当初60名の予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響でのキャンセルにより減員となりました。

*2月に実施予定でした韓国大学生訪日団 (第3団) 62名は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で実施取り止めとなりました。



アジア国際子ども映画祭参加訪日団

明石市の高校生等と共に明石市立総合福祉センターで障害者スポーツを体験交流

● 基金担当職員より
初めて体験する卓球/パレーに最初は戸惑いながらも、直ぐにコツをつかむと皆で楽しそうに盛り上がっている様子が印象的でした。



韓国青年訪日団 (第4~5団) ホスト家族とホームステイの感想報告会

● 基金担当職員より
節分の豆まきや恵方巻を一緒に作って食べた等のエピソードに大いに盛り上がりました。かけがえのない時間を過ごしたことを担当者も実感しました。

韓国青年訪日団 (第5団) 法政大学訪問交流



● 基金担当職員より
日、韓、英の3つの言語ごとのグループに分かれて、SNSの長所・短所や日韓の歴史教育、就職活動など様々なテーマでディスカッションしました。

韓国青年訪日団 (第6団) 朝鮮通信使資料館松濤園視察



● 基金担当職員より
朝鮮通信使に関する記録の保存展示を熱心に見学。日韓の友好の象徴である朝鮮通信使の歴史について学びました。



韓国青年訪日団(第7~8回)
阪神淡路大震災記念「人と防災未来センター」視察

● 基金担当職員より
当日は、大学生訪韓団OB・OGと共に防災の取り組み方について意見交換・実験見学をすとともに、被災経験者の体験談を傾聴しました。(写真は免震耐震構造実験の様子)



韓国青年訪日団(第8回)
立命館守山中学校・高等学校訪問交流

● 基金担当職員より
日本の高校生活を体験できる事から学校訪問を楽しみにしていた団員が多く、各々で学んできた日本語で積極的に話しかけていました。(写真は家庭科基礎の授業を体験している様子)

訪韓団

※3月に実施予定でした大学生訪韓団(第1~2団)2団体計80名は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で取り止めとなりました。

第13回アジア国際子ども映画祭にて韓国作品が優秀賞受賞

2019年12月に開催された第13回アジア国際子ども映画祭にて、韓国デジタルメディア高校の生徒たちが制作した映像作品『Curved fence (邦題：曲線のフェンス)』が優秀賞を受賞しました。

今回の映画祭の出品作品のテーマは「迷惑をかけることは?」。兵庫県南あわじ市で開催された授賞式には、海外15カ国・地域から45作品、日本国内からは24作品がノミネートされ、その中での受賞となりました。

本作品は、聴覚に障害のある会社員・ジフンが、会社の会議の場で自分を呼ぶ声が聞こえなかったり、言葉をうまく伝えることができずに同僚たちに迷惑をかけてしまっているとして謝るが、上司である部長はそんなジフンに対して、謝る必要はないと彼を労う。それに対し、ジフンは複雑な気持ちになるというストーリー。障害を持つ人を理解して配慮するべきと考える一方で、現実はそのようにはいかない、障害を持つ人とそうでない人との間にある“フェンス”について問う作品となっています。

今回、韓国からはこの作品のほかに、心の中にある他者への警戒心や自らの反省などを描いた作品『Post (邦題：境界線)』(韓国デジタルメディア高校)、ネット上での身勝手なコメントが相手に大きな傷を負わせてしまう可能性について訴えた作品『Because of me (邦題：自分のせいで)』(梅香女子情報高校)の2作品がノミネートされました。



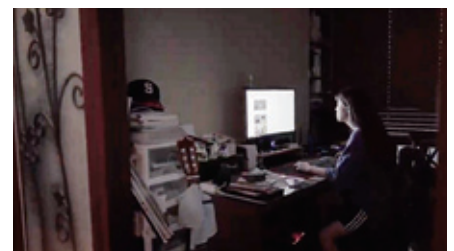
授賞式を終えて、賞状を手に記念撮影する韓国の高校生たち



『Post (邦題：境界線)』



『Curved fence (邦題：曲線のフェンス)』



『Because of me (邦題：自分のせいで)』

2 理事会開催

3月23日に第84回理事会が開催され、2020（令和2）年度予算案が承認されました。

故芳賀徹評議員を偲んで

1985年より日韓文化交流基金の評議員を務めた芳賀徹東京大学名誉教授（国際日本文化研究センター名誉教授、京都造形芸術大学名誉学長、静岡県立美術館名誉館長、日本藝術院会員）が、さる2月20日に永眠されました。故芳賀評議員は、比較文学者として、日韓文化交流基金主催の「日韓・韓日合同学術会議」や、1999年の小淵総理-金大中大統領の合意に基づく「日韓文化交流会議」に日本側委員として参加（第1期、2期）。同会議が2002年に発表した「日韓文化交流に関する宣言（ソウル宣言）」の作成にも携わりました。故芳賀評議員が残された「日韓間の知的交流に関する思い」についての文章要旨をご紹介します。故人のご冥福をお祈り致します。

「1960年代末の頃より、自分が担当する大学院研究室では、韓国の著名な学者たちを客員研究員として次々に迎え入れていた。評判を聞いてか、同時に韓国人留学生たちも毎年入学してくるようになった。みな志が高く、たのもしい秀才・才媛たちだった。彼・彼女らに誘われて1972年にはじめて韓国を訪れて以来、ほとんど毎年様々な名義で訪韓するよ

うになり、韓国と韓国人を知ることが面白く愉快でならなくなった。

近年の日韓間の政治関係は、何とか打開しなければならない。あの旧友たち、元留学生たちとの親交はいまもかわらず続いている。

「歴史認識」の問題も、彼らとの間では互いに適度に了解済みだ。日韓文化交流基金は三十周年を好機にふたたび日韓間のあの活気ある知的交流と、互いの文化への敬愛の念をうながすことに力を尽くそう。相互の文化への敬愛の念を養うことこそ、真の相互理解と友情を深めることへの第一歩だと考えるからである。」（『日韓文化交流基金30年史』より）



ヴェネツィアの大運河沿いのカ・ドーロ宮のテラスにて（撮影・提供：芳賀 満様）



表紙作品紹介



高麗駅前の將軍標（作者：下地富雄）

將軍標(장군표, チャングンピョ)は、朝鮮半島の村落の入り口に立てられる境界標です。天下大將軍、地下女將軍の一对からなり、村落に厄災が入ることを防ぐ魔除けの意味も有しています。